

4 歴史と建造物

学習を進める中、小樽という土地が、幕末から戦後という日本や世界の激動期を、実にたくましく生き抜いてきたのだということを思った。商業の中心地としての機能が札幌に移行していったことで、小樽は斜陽期を迎えたというが、逆にそのことが功を奏し、古いものは壊して新しいものを建てれば良い、という時代のうねりに巻き込まれず、観光という新たな希望や価値を見出すことにつながった訳だから、小樽という土地は、明暗を通り抜け、再生や進化を経験してきたところと言える。

テレビなどで見た美しい情景から土地に関心を持った私も、実際に訪れることでさらに興味が増し、その歴史についてより深く知りたくなった。スクラップ&ビルドの典型ともいえる東京都出身の私は、建物の個体だけでなく、全体的に統一感がとれた古風な町並みや景観を見ることができたことに、言葉では言い尽くせないほどの驚きと感動を覚えた。

以下、小樽について学んだこと、その学びを通して自分が考えたことを書いていきたい。

現在の小樽市内には、江戸時代から場所請負制によって管理された漁場ができ、鯺の豊漁に恵まれていた。開拓使がおかれ、蝦夷地から北海道と呼ばれる時代に入ると、明治政府による殖産興業政策推進のための手段として、綿花栽培用肥料の原料として注目された鯺の需要が著しく高まった。深い岸があり、雨風を防ぎやすい良質な天然の港の条件を揃えていた土地では、豊富な鯺だけでなく、様々な物資の交易が活発になった。明治10年代には、北海道初の鉄道・手宮線が小樽を起点として建設され、幌内から運ばれた石炭の積み出しを行う港としても、大いに活躍するようになった。商機をとらえた銀行や商店、商会、商社などの出店が加速。明治30年から近代的な港湾づくりも本格化し、防波堤、小樽運河、埠頭の建設という大掛かりな工事が長期に渡って続けられた。段階を追って進められた港湾の整備は、高まる物資の需要に合わせて取扱量を増やしていくことを可能にし、商いで成功した者たちは、まさに巨万の富を手にするようになった。結果として生まれた大きな貧富の差。それらを乗り越えようとした小林多喜二に象徴される労働運動。

こうした流れが良く分かるから、小樽というところは、日本の近代史を学ぶには格好の場所と言える。一時代だけでなく、それぞれの時代、そして、時代の流れを小樽に見ることができる。

過去にはヘドロなどがたまり、無用の長物のように扱われた経験をした小樽運河も、昭和40年代から市民が活発に行った保存運動の成果などが実り、再整備されるようになった。多くのことを乗り越えてきたためか、小樽という土地には、困難に直面しても生きる意味を考えさせられる。

「荒波を 超える小樽の 人と船」

< 小樽市内の歴史的建造物 >

小樽市内の至るところに残っている歴史的建造物は、今に昔を語ってくれる貴重な歴史教材と言える。歴史的建造物は、海と山に囲まれた土地の中心部から外側にかけて、密集したり、点在したりしている。私が過去に見たことがある他の地域の歴史的建造物は、ビルを避けて街の一角に集まっているか、ビルの中に埋もれ、そこに存在していることさえ見過ごされかねない境遇のものが多かった。それぞれ都市の機能が違うから、比べられない対象を無理に比べてどうこう書くつもりはないが、とにかく感じたのは、小樽のように街の中心に歴史的建造物が残り、似合わない建物が近くに建って景観が乱れた印象を与えない町並みは、今となっては相当、珍しいのではないかということ。

大地震や戦時中の爆撃の経験がない、運河の保存運動などを通して町並みや景観保護の意識が高まっていったことなどが主な背景としてあるようだが、商いをするところと住居を別の場所につくってきたことも、建て替えを免れた大きな要因になっているようだ。東京の下町にある老舗などは、古い建物を補修して使う余裕がある店は、年々、少なくなり、古くなった建物を壊して新しいマンションなどを建て、一階を店舗、上階を会社や住居部分にしたり、人に貸したりして採算を合わせるケースが多い。こうした建て替えや駅前再開発が全国規模で行われている現代において、小樽の町並みの希少価値は、益々、高まっているように思える。

テレビで小樽の特集番組を見ていると、グルメ企画でリポーターが食べ歩きをして終わってしまう印象を持つことが少なくない。その結果、広く一般の人たちに伝わるべき点がまだまだ伝わっていないということはないだろうか。私自身も実際に訪れてみて初めて、これほどまでとは思わなかったという驚きと感動で胸が熱くなった。局所的でなく、小樽の全体像が把握しやすい番組などを通じて、土地のPRがさらに進むことを祈っている。

小樽滞在中は、歴史的、文化的価値が高いものを身近に感じる事ができるという貴重な体験をさせてもらった。銀行、商店、商会、倉庫、ホテル、神社、寺院、教会、邸宅、住居などに、一つ一つ違った趣きがあり、見て楽しく、入って面白かった。再利用されている土産物店などの古風な建物の中で昔懐かしい空気を吸うのが心地良く、お店に長居をしたくなった。

地域に貢献するという考え方も、小樽には古くからあることが印象深い。旧小樽市中学(現長橋中学)、市庁舎、公会堂、小樽高商(現在の商大の土地)、旧岡崎家能舞台、旧寿原邸など、財を得た有力者たちが公に寄付をし、その後も大切に利用されている。

数ある歴史的建造物の建築的特徴を見ることも大きな楽しみとなる。石造り、煉瓦づくり木造、コンクリート、モルタル、アール・デコ、アール・ヌーボー、ルネッサンス様式など、流行や施主の好みなどによって材質やデザイン、様式などが異なる。

「建築が 静かに語るは その時代」という感じがする。

歴史的建造物を見ていると、小樽という土地が、華やかな夢を現実のものにしていた時代

があったことがよく分かる。

明治44年、大正天皇が皇太子であったときに泊まる御旅館として、豪商・藤山要吉の寄付金によって建てられた旧小樽区公会堂(現・小樽市公会堂)は、総建坪267坪、広い大広間、重厚感のある瓦屋根、皇室の菊の文様を施した正面玄関などが存在感を示す和風建築である。

北の釐酒造株式会社の前身である野口商店の二代目・喜一郎が、建築家・佐立忠雄の助言を得て設計したという洋館(現・和光荘)は、家の外壁に使われた白木が清楚で洗練された印象を緑の多い敷地の中に写し出し、絡まるツタも自然との調和を見事に演出している。金箔の仏壇がある純和風の仏間も建てられ、信仰と同時に華やかさを際立たせた財力に驚かされる。

オタモイ海岸の断崖絶壁に建てられ、遊園地を含む娯楽施設として提供された龍宮閣の写真は、昔話に出てくる竜宮城を想わせ、火事で焼失してしまった分、余計にその華やかさを想像したくなる。

まさに、「建築の 華美が魅せるは 夢世界」

近代建築史をひとつところで学べるから、建築学科の学生などにも最適な学びの場所。フランク・ロイド・ライトに学んだ田上義也の洗練された建築を見ることも、非常に良い勉強になるのではないか。さして建築に詳しくない私でも、歴史的建造物として指定されているホテルに泊まったときなど、とても良い影響をもらった。美しさ、味わい深さ、重み、落ち着き、くつろぎなどをゆっくりとした時間の流れの中で感じる事ができた。

「くつろぎの 宿で感じる 重みかな」



現・和光荘
(写真提供・小樽ジャーナル)